〔本朝世紀〕康治元年五月廿八日庚申、申刻雨雹、形如梅實、

久安五年六月廿一日辛未、申刻雷、大雹交降、如小梅子、數刻不消在地、甚爲奇、

〔吾妻鏡五十二〕文永二年正月廿日庚寅、雷雨、電光耀天、降雹動地也、　三年三月五日戊戌、天晴、陰、小雨降、午刻雷鳴自南方亘北、降雹大如李、其後晴天、酉刻又雷鳴數聲凡無時、占文之趣甚不快云云、春雹下、大兵起、五穀不熟、人民餓死云云、但戊巳雷鳴有吉文之由、有宥申之輩、

〔當代記〕慶長十四年三月朔日、駿河氷降、此日關東下總國笠井氷降テ、家十七八間破損、雷夥鳴、右家之中一屋之人悉取テ、其日ニ關宿之杉ノ木ニ掛ケル、　廿五日、下野國宇都宮領那須領氷降テ、雁、鴨、青鷺、鶉、雲雀、已下諸鳥多死、一郷ニテ雁十二拾三所モアリ、他所ハ此氷一圓不降、

〔愈の須佐美三〕寛延三年四月の末、晴天なりし申刻ばかりにや、東北に黑雲深く雪も少々ふりて、白雨つよく氷のふる事、雪のごとく二尺ばかりつもりけり、氷重さ大なるは廿八匁ありしとぞ、御城廻りより、東地屋根の瓦を碎き堀をくづし、腰板など砲子の玉の打たる如く、ふかき跡附しとぞ、烏燕雀など多く損じけるとぞ、本所邊猶强く家のくづれたるも多かりしとなり、芝青山の邊は、一旦夕だち立たるばかりなり、氷のふることはとき〴〵あれども、かゝる事は終に聞ず、是につきて四五日前、秩父山より初て、川越の城□□□三吉野の里といふあたり、大なる氷降て麥をことゞくに、打つぶしけるとぞ、